

I. 施肥のてびき

1. 麦類の施肥

<u>A. 小麦</u>	3
<u>B. ビール大麦</u>	6
<u>C. 普通大粒大麦</u>	7
<u>D. はだか麦</u>	8

効率的な施肥の推進

環境に対する負荷を軽減し、施肥量をできるだけ削減するため、稲わら・麦わらや家畜糞尿など有機物資源を有効に活用した土づくりを励行して地力の向上を図るとともに、土壌診断により土壌の養分量を把握し、養分の残存量や生育状況にあわせた効率的な施肥に努めることが重要である。

- (1) たい肥等の有機物資源を適切に施用するため、土壌診断を実施し、その結果に基づいて土壌の性質の改善に努める。
- (2) たい肥等を施用する場合は、窒素分量や化学肥料代替率を考慮して施肥量を補正する。
- (3) 土壌診断や栄養診断等の実施により土壌養分量や作物の生育の状況に合わせた、きめ細かな施肥を行う。
- (4) 局所施肥や肥効調節型肥料の利用等により、環境等に対する負荷を軽減した効率的な施肥に努める。なお、肥効調節型肥料を使用するにあたり、従前の樹脂コーティングされた肥料を使用する場合は圃場外に流出させないよう環境に配慮するか、微生物分解性のコーティング肥料を使用するよう努める。

I 麦類の施肥 [\[目次に戻る\]](#)

～稲わら・麦わらの有効活用に努めよう～

A.小 麦 [\[目次に戻る\]](#)

1. 耕起畦立栽培型の施肥

1) 地域別施肥量（シロガネコムギ）[タンパク基準値 9.7～11.3%]

(10a)

地域	目標収量	三要素(成分)			窒素施用量			備考
		窒素	リン酸	カリ	元肥	中間追肥	穂肥	
平坦	450kg	14kg	8kg	10kg	5.5kg	4.5kg	4kg	中間追肥1月上旬 中旬、穂肥3月上旬
山麓	400	13	8	9	6.5	4	2.5	
山間(畑作)	350	11	8	8	6.5	2.5	2	

※4月上旬に葉色(SPAD値)が40以下の場合、子実のタンパク基準値が確保できないことが懸念されるため、穂揃い期(4月中旬)に窒素で2kg/10a程度の追肥を行う。

2) 地域別施肥量（チクゴイズミ）[タンパク基準値 9.7～11.3%]

(10a)

地域	目標収量	三要素(成分)			窒素施用量				備考
		窒素	リン酸	カリ	元肥	中間追肥	穂肥	穂揃い期追肥	
平坦上部 山麓	400～ 450kg	14kg	8kg	9kg	6kg	3kg	3kg	2kg	中追：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上旬

3) 地域別施肥量（ミナミノカオリ）[タンパク基準値 11.5～14.0%]

(10a)

地域	目標収量	三要素(成分)			窒素施用量				備考
		窒素	リン酸	カリ	元肥	中間追肥	穂肥	穂揃い期追肥	
平坦 平坦上部	400kg	16kg	10kg	10kg	6kg	3kg	3kg	4kg	中追：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月中旬

※穂揃い期追肥については、「施肥関係参考資料」「麦類」の「ミナミノカオリ」の穂揃い期施肥基準に基づいた施用とする。

4) 地域別施肥量（はる風ふわり）[タンパク基準値 11.5～14.0%]

(10a)

地域	目標収量	三要素(成分)			窒素施用量				備考
		窒素	リン酸	カリ	元肥	中間追肥	穂肥	穂揃い期追肥	
平坦 平坦上部	400kg	18kg	10kg	10kg	6kg	3kg	4kg	5kg	中追：1月上中旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上中旬

※穂揃い期追肥については、必ず窒素施用量で5kg/10aを施用する。なお、穂揃い期追肥については、「施肥関係参考資料」「麦類」を参考にする。

5) 地域別施肥量 (さちかおり) [タンパク基準値 11.5~14.0%]

(10a)

地 域	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量				備 考
		窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	穂揃い期追肥	
平 坦 平坦上部	450kg	18kg	10kg	10kg	6kg	2kg	4kg	6kg	中追：1月上中旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上中旬

※穂揃い期追肥については、必ず窒素施用量で 6kg/10a を施用する。なお、穂揃い期追肥については、「施肥関係参考資料」「麦類」を参考にする。

6) 施肥設計上の要点

- (1) 水田、畑とも酸性土壌では pH6.0~6.5 に矯正するよう、苦土石灰等を施用する。特に圃場整備後の酸性硫酸塩土壌の場合には注意する。
- (2) 各地域において、気象、土壌、耕種法等が異なる場合には、この施肥量を基にして、地区毎に施肥設計をたてる。
- (3) 山麓ならびに河川の流域等の砂質土壌では、ややカリを増肥するとともに苦土を施用する。
- (4) 畑地などでリン酸吸収係数が高く、かつ天然養分供給量が乏しい土壌では pH を矯正しリン酸資材及び有機物を増施する。
- (5) 穂肥までに施用する窒素は3回の分施とし、元肥に 40%~60%、中間追肥は分けつ期 (3~4葉期) に 20~30%、幼穂形成期に 20~30% 施用する。施用法は播種期の早晚等、諸種の条件を考慮して決める。さらに、タンパク質含有率向上のために、必要に応じて穂揃期追肥を窒素成分で 2~6 kg/10a 施用する。穂揃期追肥の効果を得るためには時機を逸しないよう注意する。リン酸は全量元肥か 6~7割を元肥とし、残量を分けつ期の追肥時期までに施用する。カリは2回分施か窒素と同様に3回分施でもよい。ただし、山間地帯では元肥の施用割合を多くする。
- (6) 元肥や中間追肥を基準より多肥にしても増収効果は少なく、成熟期の遅延・倒伏の助長及び屑麦の増加による品質の低下をきたすので施肥量を厳守する。
- (7) 1月以降の晩播は、この施肥量の 30%減とし元肥を主体とする。
- (8) 排水がよく、条件が麦作に好適な地帯で、十分な管理をし、多収穫栽培をする場合には施肥量を増加してもよい。
- (9) 圃場整備直後の水田では、一般にリン酸が少ないので成分で 10kg 程度を増肥する。
- (10) 枯れ熟れや整粒の不揃いは、タンパク質含有率の不均一をもたらすので、適正な栽培管理に努める。
- (11) 専用の肥効調節型肥料の元肥施用により追肥の省略が可能である。ただし、施肥が遅くなると肥料の溶出が遅れるため、11月下旬までに播種を行う。
また、年次によっては生育にばらつきがみられることがあるため、留意する。
- (12) 稲わらを施用する場合には、窒素飢餓を防ぐため施用と同時に稲わら 100kg に対し窒素 0.4kg を加用する。一般的に稲わらは 600kg/10a 得られるため、窒素成分で約 2.5kg/10a

- を施用するが、稲わらを3年以上連続して施用した水田では窒素の増施は必要としない。
- (13) チクゴイズミの耐倒伏性はやや強であるが「シロガネコムギ」より弱い。
- (14) パン用小麦は実需者から高いタンパク質含有率であることが求められているので、必ず穂揃期に基準の窒素量で追肥を行う（「ミナミノカオリ」4kg/10a、「はる風ふわり」5kg/10a、「さちかおり」6kg/10a）。
- (15) 穂揃い期追肥を尿素葉面散布で行う場合、赤かび病防除との同時処理を行っても薬剤の効果に影響はない。ただし、尿素6%以上の濃度の場合は葉や芒に焼けを生じる場合がある。

2. 全面浅耕平畦ドリル、全面全層播栽培の施肥

1) 品種別施肥量

(10a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量				備 考
			窒素	リン酸	カリ	元 肥	中間追肥	穂 肥	穂揃い期追肥	
平坦	シロガネコムギ	450kg	14kg	10kg	12kg	5.5kg	4.5kg	4.0kg	—	中追：1月上旬 穂肥：3月上旬
	チクゴイズミ	400kg～ 450kg	14kg	10kg	12kg	6.0kg	3.0kg	3.0kg	2.0kg	中追：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上旬
	はる風ふわり	400kg	18kg	10kg	10kg	6.0kg	3.0kg	4.0kg	5.0kg	中追：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上旬
	さちかおり	450kg	18kg	10kg	10kg	6.0kg	2.0kg	4.0kg	6.0kg	中追：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上旬

2) 施肥設計上の要点

耕起畦立栽培型の施肥設計上の要点と同様である。

3. 大豆あと作麦類施肥

1) 品種別施肥量

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量				備 考
			窒素	リン酸	カリ	元 肥	中間追肥	穂 肥	穂揃い期追肥	
県 下 全 域	シロガネコムギ	420kg	12kg	8kg	10kg	6kg	3kg	3kg	—	中間追肥：1月上旬 穂肥：3月上旬
	チクゴイズミ	420kg	10kg	8kg	9kg	4kg	2kg	2kg	2kg	中間追肥：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上旬
	ミナミノカオリ	400kg	12kg	10kg	10kg	4kg	2kg	2kg	4kg	中間：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月中旬
	はる風ふわり	400kg	15kg	10kg	10kg	4kg	2kg	4kg	5kg	中間追肥：1月上旬 穂肥 ：2月下旬～3月上旬 穂揃い期追肥 ：3月下旬～4月上旬
	さちかおり	420kg	16kg	10kg	10kg	4kg	2kg	4kg	6kg	中間追肥：1月上旬 穂肥 ：2月下旬～3月上旬 穂揃い期追肥 ：3月下旬～4月上旬

2) 施肥設計上の要点

- (1) 初年目の大豆のあと麦は生育量が大きく、倒伏しやすいので減肥する。
- (2) 大豆～麦を連続して栽培すると、土壤肥沃度が低下するので、大豆茎・莢や麦稈等の有機物を施用して地力増強をはかる。
- (3) 干拓地の畑作麦についても、この基準に準じるが、苦土質肥料の施用は控える。
- (4) その他の事項は、地域別施肥量の施肥設計の要点に準じる。

B. ビール大麦 [\[目次に戻る\]](#)

1. 耕起畦立栽培型の施肥

1) 地域別施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目 標 収 量	三 要 素 (成分)			窒素施用量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	サチホゴールド	400kg	12kg	8kg	10kg	6kg	4kg	2kg	中間追肥1月上中旬、穂肥3月上旬
山麓	サチホゴールド	350	11	8	8	5.5	3.5	2	

2) 施肥設計上の要点

- (1) 気象、土壤、耕種法等により、施肥量は若干増減してよいが、苗立数が多い場合は窒素を増施すれば倒伏などにより減収あるいは整粒歩合、品質低下のおそれがあるので慎重を要する。リン酸、カリについては小麦に準ずる。
- (2) 酸性土壤では特に生育、品質とも劣るので、pH6.0～6.5に矯正するよう苦土石灰等を施用する。特に、圃場整備後の酸性硫酸塩土壤の場合には注意する。
- (3) ビール麦は苦土欠乏症を発生しやすいので、そのおそれがあるところは事前に苦土を施用する。
- (4) 追肥は、分けつ期（3～4葉期）に3～4割施す。
- (5) 緩効性肥料を施用する場合は全量元肥とする。ただし、施肥が遅くなると肥料の溶出が遅れるため、12月中旬までに播種を行う。
- (6) 稲わらを施用する場合には施用と同時に、稲わら100kgに対しチッソ0.4kgを加用するが、3年以上連続施用田では増施窒素分は必要としない。
- (7) 圃場整備直後の水田では、一般にリン酸が少ないので成分で10kg程度を増肥する。
- (8) ケイ酸、ケイ鉄などの土づくり肥料を稲作時に施用できない場合は、麦作時に施用する。

2. 全面浅耕平畦ドリル、全面全層播栽培の施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目 標 収 量	三 要 素 (成分)			窒素施用量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	サチホゴールド	420kg	14kg	10kg	11kg	7kg	5kg	2kg	中間追肥1月上中旬、穂肥3月上旬

2) 施肥設計上の要点

(1) 耕起畦立栽培型の施肥設計上の要点と同様である。

3. 大豆あと作麦類施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒素施用量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
県 下 全地域	サチホゴールド	400kg	8kg	6.5kg	6.5kg	6kg	0kg	2kg	穂肥3月上旬

2) 施肥設計上の要点

- (1) 初年目の大豆のあと麦は生育量が大きく、倒伏しやすいので減肥する。
- (2) 大豆～麦を連続して栽培すると、土壤肥沃度が低下するので、大豆茎・莢や麦稈等の有機物を施用して地力増強をはかる。
- (3) 干拓地の畑作麦についても、この基準に準じるが、苦土質肥料の施用は控える。
- (4) その他の事項は、地域別施肥量の施肥設計上の要点と同様である。
- (5) 山麓部の砂質土地帯で微量要素欠乏症が見られる場合は、土壤診断を実施し、微量要素を含む資材を施用する。

C. 普通大粒大麦 [\[目次に戻る\]](#)

1. 耕起畦立栽培型の施肥

1) 地域別施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	は る か 二 条	480kg	14kg	14kg	14kg	6kg	4kg	4kg	中間追肥1月上 中旬、穂肥3月 上旬
山麓	煌 二 条	350kg	11kg	11kg	11kg	5.5kg	3.5kg	2kg	
	は る か 二 条	420kg	12.5kg	12.5kg	12.5kg	5.5kg	4kg	3kg	

2) 施肥設計上の要点 ビール大麦に準ずる。

2. 全面浅耕平畦ドリル、全面全層播栽培の施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	は る か 二 条	540kg	15kg	11kg	13kg	7kg	5kg	3kg	中間追肥1月上 中旬、穂肥3月 上旬

2) 施肥設計上の要点

(1) 小麦ならびにビール大麦における耕起畦立栽培型の施肥設計上の要点と同様である。

3. 大豆あと作麦類施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	はるか二条	540kg	10.5kg	8.5kg	8.5kg	6kg	3kg	1.5kg	中間追肥1月上旬 中旬、穂肥3月上旬

2) 施肥設計上の要点

- (1) 小麦における地域別施肥量ならびに大豆あと作の要点に準ずる。

D. はだか麦 [\[目次に戻る\]](#)

1. 耕起畦立栽培型の施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	イチバンボシ	350kg	10kg	10kg	10kg	6.0kg	4.0kg	0kg	中間追肥は、 1月下旬

2) 施肥設計上の要点

ビール大麦に準ずる。